



高宮斎場での「鎮魂」に臨む研修生



10月祭事暦

- 秋季大祭(田島放生会)
- 1日 海上神幸(みあれ祭)
 - 9:30 大島港出港
 - 10:30 神湊港入港
 - 11:40 一日祭(入御祭)
 - (主基地方風俗舞奉納)
 - 2日
 - 8:00 流竈馬神事
 - 於=神門前 参道
 - 11:00 二日祭(浦安舞奉納)
 - 3日
 - 11:00 三日祭(翁舞奉納)
 - 引き続き 高宮 秋季大祭
 - 〃 第二宮・第三宮秋季
 - 〃 宗像護国神社 秋季
 - 14:00 南坊流献茶祭
 - 於=辺津宮 本殿
 - 18:00 高宮神奈備祭
 - 於=高宮祭場(悠久舞奉納)
 - 15日 月次祭
 - 10:00 高宮祭
 - 〃 第二宮・第三宮祭
 - 引き続き 宗像護国神社 巡拝
 - 11:00 総社祭(豊栄舞奉納)
 - 17日 11:00 表千家献茶祭

第四回 出光興産(株) 中堅社員研修 開催

出光興産の将来を担う社員を対象とし、店主室教育研修(六十五期まで)から新たに実施され、第四回目を迎えた中堅社員研修が、九月二〜四日当社で開催された。

本年度最初の研修である今回は、前回までより一回の研修生の受け入れ人数を六名増やし、三十五〜四十八歳の研修生三十六人と、本社人事部教育課の山元教育課長以下二人の計三十九人が研修に入った。

暑厳しい九月二日、全国各地から研修生が続々と参集。同会社・グループは、社員数六五〇〇人を誇る巨大企業、再会するのは入社以来、或いはほとんどが初対面という面々であった。

この宗像大社から、千葉・平川寮までの十五日間に亘る一次研修(二次まで)がスタートするわけだが、残



そろそろ足がしびれて...

「原爆の戦友に詫びなむ 七十路」に心を打たれ...から始まる当時広島陸軍幼年学校三年生で被爆された方の体験手記▼昭和二十年八月六日の広島市上空、五百八十メートルで史上初の原子爆弾が炸裂、突然の閃光と激しい衝撃を感じた瞬間、数メートル吹き飛ばされ、薄れゆく意識の中で「死」を予感しつつも、友の声で我にかえり、夢中で屋外へ。そこで十五歳の目に映った「地獄絵図」▼そして生死をさまよう闘病生活の中、幼くして軍人を志望した身に、激しい衝撃が走った八月十五日。幾たびもの幸運により、十月下旬に一応の退院を許されて帰郷にいたるのだが、この間の精神・肉体の状態たるや、想像を絶するものであろう▼「オレハ神様が守ってくれている。決して死なない。」という強い気力が支えとなり、その後見事に回復。神社界の第一線で重責を全うされた▼十年前には夫婦で被爆地を訪れ、「ヒロシマを誰が語るとも 苦しきに 斯く静かなる声に君の言ふ」と奥様が詠まれたとある▼当時の友の冥福を心から祈り、全く風化されることのない想いで綴られたこの手記で、「真の強さ」を痛切に感じ、六十年を経た今、気がつけば何度も読み返している。(Y-I)



神具・装束 結婚式場調度品

福岡店 〒812-0045福岡市博多区東公園2-31
電話 福岡(092)651-9456番

井筒 本店 〒600-8231京都市下京区油小路六条北入
電話 (075)341-3341(代)~4番
(075)343-3341番

木組の家 匠の技

総合建築業 株式会社 弘江組

〒811-3406福岡県宗像市稲元1025 電話(0940)32-2567

九月二日 (一日目)

- 一三三〇 全国各地から研修生が当大社に参集。
- 一二二四五 開始奉告祭に参列後、研修日程に入る。
- 一三三〇〇 神島宮司開講挨拶
- 一三三二〇 曾根田人事部次長講話
- 一四〇〇〇 人事部教育課担当 者行程説明
- 一四三三〇 白衣・白袴の着け方、潔斎
- 一六〇〇〇 神社祭式作法(朝拝演習)
- 一八三三〇 夕食
- 一九三三〇 鎮魂
- 二〇三三〇 入浴・就寝

研修生にはこの二泊三日の研修期間を神社の境内で過ごしていただくため、まず白衣・白袴の着装・畳み方から入った。

「恐らく最初で最後でしょう。結婚式以来」との声も聞かれる中、初めての白衣・白袴に戸惑いながら何とか着装を終えると、次は「潔斎」。一〜六班の班毎に潔斎場へ移動し潔斎、再び白衣・白袴を着装すると、次は朝拝で奏上する『大祓詞』の講義、朝拝演習と、当大社祭儀部の神職が総動員で神社祭式作法の基礎を約四時間に亘り指導した。

夕食後、一日の締め括りは高宮齋場での「鎮魂」。研修生も勤務先の先輩から耳にしている研修の山場である。

浄園の参道を懐中電灯の灯りを頼りに、百八段の石段を進む。玉砂利の敷かれた露天祭場に正座し、神職の「鎮魂はじめ」の掛け声で鎮魂に入り、「鎮魂やめ」の声で終了した。経験された方ではか味わえないものを感じていただいたように思う。

その後、各班毎に順番で潔斎。初日の行程を終えた。



研修開始奉告祭

九月三日 (二日目)

- 六〇〇〇 起床・洗面・潔斎
- 七〇〇〇 朝拝準備、境内清掃
- 八〇〇〇 朝食
- 八四四〇 神宝館見学
- 九五五〇 記念撮影
- 一〇〇〇〇 宗像大社御由緒講義
- 一二〇〇〇 昼食
- 一三三三〇 筑前大島渡島
- 一三三三〇 中津宮・沖津宮遥拝所・御嶽宮参拝
- 一七〇〇〇 店主の理念を育んだ時代背景についての講義
- 一八四四〇 夕食
- 一九三三〇 鎮魂
- 二〇三三〇 入浴・就寝

二日目は朝拝・朝食後、九州国立博物館への出陳で話題となつている神宝館を見学。建国を彩る宗像神の歴史を、約一〇〇〇件の国宝、十二万点の重要文化財という出土品を通して感じていただいた。

当大社御由緒の講演後、昼食を挟んで午後からは、白衣・白袴からスーツに着替え大島へ渡島。中津宮・沖津宮遥拝所・御嶽宮を参拝した。

天候がよかったが、夏の時期で海上に霧がかかっており、残念ながら遥拝所からも、御嶽山山頂からも沖ノ島を拝すことは出来なかった。

帰社後、夕食をとり、店主(創業者) 出光佐三氏)の理念を育んだ時代背景についての講義を、出光の古池課員から受け、鎮魂。二日目を終えた。

九月四日 (三日目)

- 六〇〇〇 起床・洗面・潔斎
- 七〇〇〇 朝拝準備・境内清掃
- 七三三〇 朝拝(研修終了奉告祭)
- 八〇〇〇 朝食・着替え
- 九三三〇 出発
- 宗像市赤間の店主生家見学の店主墓参
- 福岡空港より千葉・平川寮へ移動



今年からクールビズでの参加です



神島宮司 開講挨拶



高宮参道を進む研修生



中津宮で葦津祢宜の話に耳を傾ける研修生

最終日は神島宮司以下神職・巫女・管理員・調理員・事務員ら全職員の見送りを受け、次の研修地へ出発された。
その後一行は、宗像市赤間で店主墓参をし、福岡空港から千葉の平川寮へ向かい、十一日間の研修に入るということであった。
二泊三日という短期間であったが、



モヤがかかっていて、沖ノ島は見えませんでした



中津宮も正式参拝

この宗像大社で過ごした時間が、研修生の日々の生活で、一人一人の長い目で見た今後の人生でお役に立つことを切に願ひ、研修生皆様の今後益々の御健勝と御活躍をお祈り申し上げます。

第三回 家族木工教室開催



黙々作業を進める参加者

八月二十八日第三回目となる家族木工教室が十五家族、三十八名の参加者を迎え境内で開催された。この教室は、当大社の様々な木造建築物の修・造営に携わった、宮大工の棟梁が中心となり、職人十七名の全面的な御協力・御奉仕で開催となった。

本年の木工課題は「カサ立て」である。参加の家族、子供達は慣れない手つきでノコを挽き、釘を打ち悪戦苦闘しつつも時には、プロの職人さんの技術に驚きながら、時間を忘れて作業は進んだ。
また、猛暑の中、JA宗像田島支店・宗像市消防団第八分団より御協

意識せずとも「物」に溢れ、自らの手で何かを「創る」という機会が少なくなった現在、日本の豊かな自然・風土の中から生まれた「木の文化」に触れ、夏休みの思い出として家族で一つのものを作ってもらおうという趣旨で行われた。
当日は心配された天候もなんとかもちこたえ午前九時には宗像市内はもとより県内各地から参加家族が集合し、本殿で安全祈願祭、棟梁の作業説明後、一斉に制作に取り掛かった。

力いただいた「かき氷」は子供達に更なる作業意欲を与え、午後三時にはそれぞれ好みに色づけされた完成品が並んだ。
引き続き、家族レレー式の丸太早切競争が行われ、当初に比べ多少慣れた手つきで、賞品付ということもあり歓声の飛び交う競争となった。
そして、午後三時半には全ての日程を終了し、表彰式並び閉会式が行われ家族たちは思い出となる作品を抱えお宮を後にした。



宮大工の教授を受ける参加者

平成十七年度 学芸員実習開催

八月二十九日から九月八日まで（一日休みを含む実質十日間）当大社神宝館において、平成十七年度の博物館実習が行われた。

この実習は大学で学芸員資格取得を志し、博物館学芸員課程を履修している学生を対象に、当大社

文化財管理事務局が毎年同時期に実施しているものである。今年は県内外より男性四名、女性十二名の計十六名が受講した。

実習生は毎朝、朝拝式に参列。神職の祝詞奏上により気を引き締めて講義に向かい、連日あらゆる

観点から専門的、実務的事項について学んだ。

初日の堤文化財管理事務局長による講話をはじめとして、

民俗学（楠本正氏による絵馬、石井忠氏による漂着物）、考古学（松本肇氏）、歴史学（河津学芸員）、保存科学（横田義章氏）、博物館学（重住学芸員）の講義を受講し、刀剣手入れ（藤川宣重氏）、拓本採り、資料整理なども体験した。

初めて観る現場、



興味津々刀を手にする実習生ら



刀剣について講義をする藤川先生

初めて行う実務に、実習生は終始緊張していたが、誠実に熱心に取り組んでいた。文化財の保存・管理への取り組み、歴史的価値を見出すための調査・研究、日々の職務から得られた成果を人々へ還元するための展示実施など、学芸員の責務を当実習で体感した学生らは、職務内容が多岐に及ぶことに変化驚いていたが、其々がこの職務に対して新たな魅力を感じ取り、学芸員資格取得へ向けてさらなる意欲を燃やしている様子が伺え、指導する側にとっても励みになった。当大社実習受講生の中から、将来、有能な学芸員が生まれることを願って止まない。

ある日の社頭風景

西鉄観光バス株式会社新車バス安全祈願祭



これらのバスは、九州はもとより西日本を中心に活躍する予定となっている。

全車両のお祝いが終わると、運転士たちは「これで安心」と口々に話し、生き生きとした表情で新車となった担当バスに乗り込み大社を後にした。交通ルールを守り、事故の無い安全運行はもとより、同社の益々のご繁栄を心よりお祈り申し上げます。

九月二日西鉄観光バス（株）が、大型バス（四十五人乗り）八台、中型バス（二十七人乗り）二台、計十台の新車両の交通安全祈願祭（車祓）に来社され、社員一同交通安全を祈念した。

同社所有のバスは約二百台、その内毎年十台程度の定期買い替えを行っているが、お客さんに乗せる前に必ず車祓に参拝されている。



玉串を捧げ拍手を打つ各車の運転手さんら

第二十九回 東西神社人野球大会視察 ～来年より宗像大社・太宰府天満宮合同チームで出場決定～

八月二十二～二十四日、第二十九回目を迎えた東西神社人親善野球大会が、香川県琴平町(金比羅宮当番)で開催された。

この大会は伊勢神宮、熱田神宮、出雲大社・金比羅宮合同チーム、東京、兵庫の五チームが参加し、毎年行われており野球のみならず神社界の交流を目的とした大会。

九州からの参加は無く、今回太宰府天満宮・宗像大社合同チームでの参戦を申請するため、当大社神島宮司、神職二名、太宰府天満宮神職二名の計五名が出向した。

金比羅宮の鎮座する琴平町に参集した一同は、まず金比羅宮を正式参拜。その後の役員会で、九州勢の参戦が全会一致で可決され、来年から太宰府天満宮・宗像大社合同チームでの参戦が決まった。

初日は前夜祭で、再会を祝し散会。翌日試合開始となった。

入場行進に選手宣誓と、華やかに開会式が行われ、金比羅宮の琴比羅宮司の始球式でプレイボールとなった。草野球とは思えない、レベルの高い白熱した試合が展開された。

決勝は当番である金比羅宮・出雲大社合同チーム対熱田神宮となり、序盤から熱田神宮が先制、徐々に得点を重ね一時は六点差となり、勝敗は誰もが決したと感じていた。ここまで全て先制したチームが僅差で勝ち上がりつており、ここまでの大量リードでは誰もがそう考えて当然だが、ワンプレイで投手が崩れられよれよという間に同点。最後はサヨナラで金比羅宮・出雲大社チームが優勝した。



全試合真剣勝負

の笑顔、閉会式での金比羅宮職員への歓声が印象的であった。当大社と太宰府天満宮は、毎年春と秋に対抗戦を行ってきたが、来夏は力を併せ全国の神社と対戦する。その来夏は兵庫チームの当番で、日程も八月二十一日～二十三日と決定しており、現在神戸グリーンスタジアムか大阪ドームが検討中とのこと。三十回の記念大会に相応しい大会となるよう、両社では合同練習も含めてのチーム力アップが検討されている。



出雲大社・金比羅宮合同チームの優勝で幕を閉じました



開・閉会式では入場行進もありました



全国各社の宮司が勢揃いでした



祝 第29回東西神社人親善野球琴平大会

(続)

浜の寄物

197

いしい ただし



八月一日・二日の二日間彦岐島へ行った。原の辻遺跡では、炎天下に発掘調査が行われていた。

一九日には原の事務所の安楽勉所長や彦岐郷土館の市山等館長、彦岐出身の考古学者塩屋勝利氏と彦岐の古墳や遺跡を車でまわった。長崎県内最大の双六古墳は全長九メートルの堂々とした前方後円墳である。外から石室内をのぞく、串山ミルメ遺跡に近い海岸では漂着していたウミガメの甲羅片が散乱していた。

彦岐は対馬暖流が直接ぶつかる場所であり、昨年秋に行った時には海岸を車で巡ってきたが、漂着物の多さには驚いた。原の辻遺跡から二個のココヤシ製笛が発掘されているのも頷ける。今後、彦岐の遺跡からは南方果物の種子類の発見も十分考えられる。

市山等館長から「コマの大航海」というチラシをもらった。東京のグループ・ニライカナイが、沖縄県・与那国沖から六月初めに一千個を流している

コマのことである。以後二ヶ月間隔で一千個ずつ総計一万個を流すというものである。

コマは直径八センチ、軸が一〇・五センチ、表面には二〇〇五(〇八)海流調査中 RESEARCH NOCEANCURRENTSとあり、日本語、英語、韓国、スペイン語で書かれている。

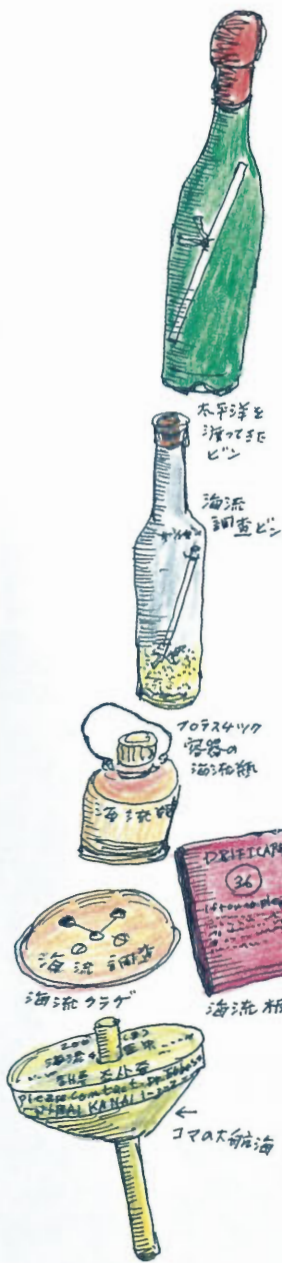
「コマの大航海」の目的は海流調査であるが、チラシにはアメリカ大陸に初めて渡ったモンゴロイドは氷河期の頃で、ベーリング海峡は氷でつながり、陸伝いに北アメリカに達し、更に南下をしながら南アメリカまで到達したというのが定説だが、また一方でアジアから船を使って移動したことも考えられるのではないかとし、日本の縄文土器と同じような土器が南米エクアドルから出土していることがピラの中で触れられている。陸路だけでなく太平洋を渡った可能性もあるのではないかという

のである。

彦岐から帰った翌日、沖縄県・与那国の久野幸子さんからそのコマが送ってきて驚いた。与那国島に一〇個ほど漂着したという。

この前「ズニ族の謎」(ナンシー・Y・ディーヴィス著ちくま学芸文庫)を読んでいたら、日本人が一三世紀ごろ、船で太平洋を渡ってアメリカ西海岸に到着し、ロスアンゼルスから約六六四マイル内陸のニューメキシコ州のズニ族の村に住みついたという説がある。歴史・文化・言語等から検証しているが、色々と疑問や問題があるが面白く読んだ。「ズニ族の謎」の著者は「コマの大航海」

の発案者であるアメリカの漂着物学者エビスメイヤー博士の漂着物研究もとり入れてるので、両者の間にコマを通して、そのコマの拡散と漂着を実証しようとする意図があるのではないだろうか。



第35回 西日本菊花大会のご案内

神郡宗像に菊の季節が到来しました。九州各県を中心に、全国の菊花愛好家が丹精込めて作り上げた銘花約3000鉢が、境内中に展示されます。この大会の最高賞は内閣総理大臣賞、この他に大臣賞が十一本授与され、別名「菊作り九州ナンバーワン決戦大会」とも呼ばれています。

期間中は、観菊者、七五三詣での家族連れなどで賑います。また菊苗・菊鉢の販売、勅使館をこの時期限定で特別に開放「抹茶コーナー」、豪華景品が当たる『菊みくじ』、宗像観光協会の運営する『いづく茶屋』なども開かれています。

是非、御参拝下さいますよう御案内申し上げます。

期 間	11月1日(火)～11月23日(水)
時 間	終日 夜間はライトアップもしております。
会 場	宗像大社境内
表彰式	11月13日 午前10時～ 於＝アクシス玄海
拝観料	無料
駐車場	無料



6 小品盆栽



1 観光協会案内所



7 千輪咲き



2 菊みくじ



8 大輪



3 懸崖



9 盆栽



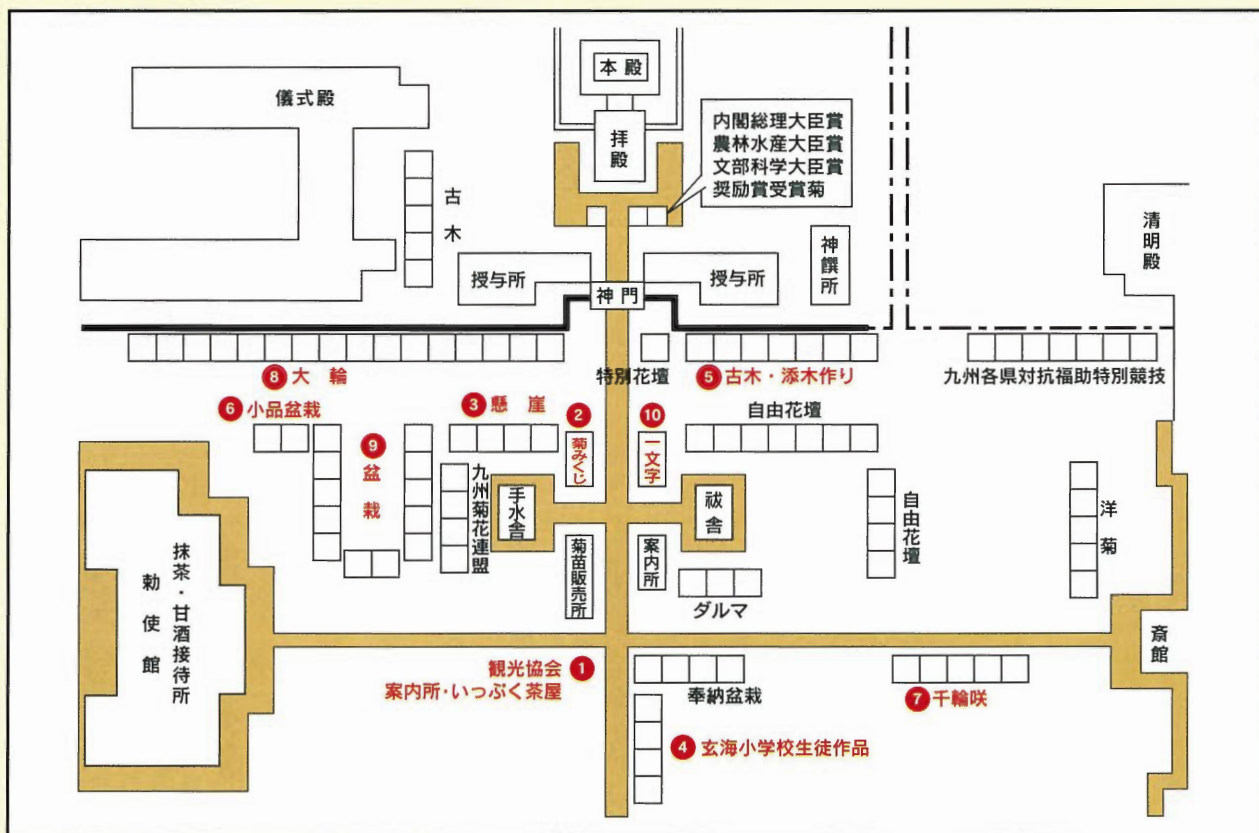
4 玄海小生徒作品



10 一文字



5 古木添木



お知らせ

宗像大社神宝館では平成17年11月1日(火)～11月27日(日)まで「宗像大社刀剣展」を開催致します。つきましては本展示会の展示準備、撤去に伴い下記の日程にて休館予定です。
10月30日(日)、31日(月)、11月28日(月)～30日(水)
 いろいろとご迷惑をおかけしますが御理解の程宜しくお願い申し上げます。

第五三〇回

宗像大社歌会詠草

大野展男選 毎月25日メット



宗像市 日の里 石松 弘次

翔ぶ蝶を小鳥が攫ひてゆきたりき一瞬なれど寂しくもあるか

(評) 弱肉強食のこの世である。承知はしていても、犠牲になったのが蝶ゆえに作者の悲しみは深い。

宗像市 朝野 藤井 浩子

押入れに筑前琵琶とバイオリンわが生れし家いま異国めく

(評) 「夏草や兵共がゆめの跡 (芭蕉)」の家庭版か、琵琶もバイオリンも、かつては励んでいた作者だったのだろう。

宗像市 田野 森 甲子

梅雨明けの樽見峠は鬱蒼と木々の繁りて道に迫りく

(評) 植物は季節の変化を敏感に反応し人はそれによって一層季節を感じるのである。久しぶりの外出の作者であろう。

宗像市 池田 森 龍子

炎天に咲きつく芙蓉を際立たせ讀葉二本茂みの深し

(評) 森の樹々を詠った甲子さんの視点から二つの木の変化に視点を移した一首。「炎天にそよぎをる彼の一樹かな (虚子)」が思い出される。

宗像市 大井 木原 ふさ子

摒ぎわの日陰好みて群生の秋海棠の広葉は歪む

(評) 前二者より更に焦点をしばって、万物が死んだように静まり返った炎昼の秋海棠の葉を詠う木原さんである。

福津市 在自 佐々木和彦

満月が通りすぎたる夜の明けて羽毛のごとき雲の出でたり

(評) 「綿津海の豊旗雲に入日さし今夜の月夜清く明りこそ (天智天皇)」の一首にも通じ、かすかな秋の気配を感じた歌である。

宗像市 大島 杉田 禮子

盆踊りの櫓を解く音早朝の浜にしてをりこの夏もゆく

(評) 浜から盆踊りの櫓を解く音がきこえる。それは相当に大きな櫓であることを想像させ、島の大切なイベントであることも判る。それゆえ作者は「この夏も

ゆく」と詠嘆しているのである。前作が天然自然の現象から季節を感じているの対し、宗像行事から季節の移りを感じた作品に土着の深さがある。

宗像市 日の里 大和 美由紀

星まつり近づく宮に來合せてむすびの神に祈ぎ事書きぬ

(評) 「宮に來合せ」と「むすびの神」の意味の上での重複が惜しい。祈ったことを具体的に述べて欲しかった。

宗像市 大島 越智 治子

願ひごと書きし短冊竹笹に下げても樂し七夕の宵

(評) この作品も何を願ったのか、それを述べるにより歌は具体性を帯びるのに、その一歩手前で終わっている。

宗像市 東旭ヶ丘 天野 玲子

アフリカに飢える人びと伝えたる同じテレビに食事ショーあり

(評) リアルタイムで世界の出来事を伝えるテレビ。そこに便利性和同じく落し穴もある。同じ事を一日中放映しても飽きられるのであれこれコマ切れるに趣向を変えるのだから、番組の組合せ次第では、この一首のような批判となる。それでも食事番組の多さお粗末を私のみならず大方の人が感じているのだが、変らない。

宗像市 光岡 森田 富佐子

風呂上り団扇片手に散歩する浴衣姿の乙女可愛ゆし

うきは市 浮羽町 向 則正

故里の別府の家に帰り来て姉の残せし茶掛見つむる

福岡市 南区 井田 有久衣

病室のテラスの陰でこっそりと朗詠すれば聞きとがめらる

宗像市 鐘崎 安永 久子

要領の良き人悪き人入りみだれ決戦のゆくえ心してみむ

選者詠

血塗りたる手もあるならん肩を組み古き兵らが軍歌をうたふ

兵たりし人の葬りか山門に低唱しをり「くさむす屍」

裏庭を掘れば白骨いくらでも出るよと言ひるき原爆忌くれば



宗像大社歌会 俳句作品集(五〇五)

宗像市 光岡 白土 凌一

新涼に高く飛び交う赤とんぼ

宗像市 光岡 井上 嘉治

犬の尾も垂れて真昼の蟬時雨

宗像市 日の里 花田いつ枝

初秋や祈願の新車滑り出す

宗像市 東郷 宗風社俳句会

炎天や火を踏む如き浜の砂

吉田 湧水

黒蝶と共に憩ふや木下影

吉田 杏子

民宿は裏山背負い土用浪

田中 雨葉

物忘れ夢の中まで熱帯夜

木原 房子

編集後記

この社報を編集したいという文化事業を行い、毎年テーマを決め一冊の本を発表されています。沖ノ島を舞台にした昨年の同文庫「はるかな島のものがたり」が、今年西日本新聞社の読書感想画コンクールの指定図書(小学3・4年生)に選ばれました。現在愚妻が小学三年生の担任をしており子供達にこの本を題材にし絵を描かせたところ、島・宗像三女神・オガチ・宝物といろいろ描いたよつです。しかし、後日実際の沖ノ島や出土品、オガチの写真やビデオをみせると、その驚きはすくなく、沖ノ島はすつと空想の島だと思われていたようです。こんな夢の島の話の聞いたら、大人でも空想だと思ってしまうですね。でも、もっと多くの方に知っていただきたいと思えます。(MO)

宗像大社社務所 発行所

〒811-3505 福岡県宗像市田島 電話 0940-62-1311(代) 発行人 伊藤佳和 編集人 大塚宗延 制作 宗像大社社務所 印刷 セネラルアサヒ

定価1年送料共1,000円